



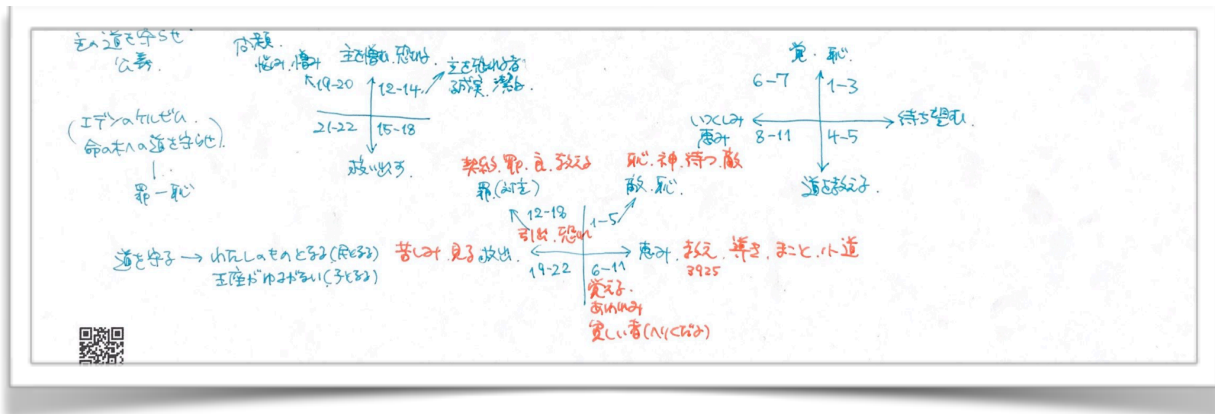
詩篇25篇

[illegible]

詩篇25篇を分析してきました。詩篇25篇はアルファベットの詩篇です。アルファベットの詩篇は、出だしがa,b,c,d…、abcではないのですけれど、アレフ、ベスなのですけれど、a,b,c,d,e,f,gというこのアルファベットで始まっている詩篇で、この節の付け方でいうと、22節だけはついていないのですね。他は全部ついているというアルファベットの詩篇ですから、これは覚えなさいと言われていたようなものです。アルファベットの組がどうなのかということで分かれているわけではないと思います。

区別するところを、この詩篇を読むと、似ている話がいっぱいあります。「道だ、また道だ、また道だ、まことだ、まことだ、教えてくれる、教えてくれる」など、繰り返し出てくることばがたくさんあって、いつものように目が回ります。

機械色ぬりという表をやっていますけれど、ストロング番号が25篇の中で、繰り返し2回以上出ているものをピックアップして、その箇所を、元の契約1285はカベナント、1285はカベナントと言ってここに印がでています。導く、導く。道、道、道、道。覚える、覚える。罪、罪。恵み、恵み、恵み。慈しみ(×2)、見せる。連れ出す、恐れる。教える、教える。守る、守る。真実、真実。へりくだる。悩む者(×2)。待ち望む、待ち望む。恥を見させる、恥を見させる。そうすると、頭のほうと最後に道がありますね…ということを確かめるときにこの表を使ってみてください。



どこで分けるのだろうかということなのですが、1節から11節までと、12節からというように大きく分けられるだろうと、その中を4つずつに見ましたというのがこの表です。前半を4つに分ける。後半を4つに分ける。少し長いですが、そういうことが可能だと思います。すべきだということも言えると思います。1234.1234と。その組み合わせを見ながら細かいところも見だして、4つに分けましたというのが、こちらの表になります。

オレンジ色で書いているところが、斜めa,b,b,aのaの部分に特長のある言葉、恥、はずかしめ、神…わが神(25:2)と神よ(25:22)という神があったり、待ち望む、敵ということばが、この2つの段落に共通していて、こちらにはないよというのが、斜めのほうです。

真ん中の2つのところには、契約、罪、慈しみ、教えるというところがありました。後半の方には、苦しみ、悩み、それと見る、私は見えていますということと、前半には、教え、導き、まこと、小道というようなことが見えます。特に6節から11節に繰り返しているのが、覚える、あわれむ、貧しい者、へりくだる者。12節から18節の中には、取り出す、引き出す、主を恐れる、主を恐れるがここにあるねというようなキーワードの分布を見て考えると、前半のこの最初ですね(1-5)、敵に恥を見させられている、はずかしめられているけれども、私は神様を待ちますという段落。だから、導いてください、教えて下さいということですね。次の段落(6-11)は、神様の契約を覚えて罪を赦してくださいって、この貧しい者をあわれんで導いてくださいということ。3番目の段落(12-18)は、契約を覚えてください。主を恐れる者を約束を覚えて連れ出してください、救い出してください。それで、最後(19-22)に敵が多いのを見て、私があなたを待ち望んでいますから、連れ出してあがない出してくださいというの4番目の段落。

外側が特に敵と関係しています。中は罪ということですから、全き道を歩みます。それで、敵からははずかしめを受けないようにということ。それで、全体として、教えて導かれるように、主の道についてを教えている詩篇だということがそのようなところから出てくるものだと思います。神様の道に歩むということをこの4つの側面で教えているというのが25篇ということになると思います。

この25篇の言い方を見たら、思い出さないといけない箇所というのがいつものように、山ほどありますが、特にこういうところなのではないかなというところですね。

例えば(11)「主よ、み名のために私の罪をおゆるしてください」という言い方を見たら、いろいろな箇所があります。出エジプト記とか申命記とかありますが、そのようなことを思い出しつつ、第2歴代誌7章14節を見ると、ソロモンが神殿を建てたところです。

「わたしの名を呼び求めているわたしの民みずからへりくだり、祈りを捧げ、わたしの顔を慕い求め、悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて彼らの罪を赦し、彼らの地をいやす」というソロモンに神様が答えてくださるところですけど、罪を赦してくださる神様の名が付けられている家というのが神殿です。第2歴代誌6章でソロモンが祈ります。天におられる神様に向かって、このしもべ、へりくだった者が祈るわけですけど、聞いてその罪を赦してくださいということが7度出てくるわけです。その罪を赦してください、あなたの名を呼ぶ者の罪を赦してくださいと言える元のところは、神様ご自身が出エジプト記32章(6節)のところで、いつもの名前のところ。主の名を宣言してくださったその名の中に「主はあわれみ深く情け深い、怒るのに遅く恵みとまことに富み」恵みとまこと、慈しみというのがいっぱいありますね。それで、「恵みを千代まで保ち、咎とそむきと罪を赦す神様である。この民は確かにうなじのこわい民ですが、咎と罪を赦します。そしてご自分のものとしてくれる。」罪を赦すというのは、ご自分のものとするということに直結する感じです。あがなった。罪を赦したら神様のものになる。その罪を赦される道に歩むことを求められているのです。それで、この34章が与えられる前の箇所の金の子牛を作ってしまったところ、主のところにモーセは上ります。「主は罪のあがないをしてくださるでしょう」と言って神様のところに行きます。罪を赦してくださるならばと言ってとりなしの祈りをします(出エジプト記32:32-)。それで、「もしも私があなたの御心にかなっているのでしたらどうかあなたの道を教えてください」主の道を教えてくださいとモーセは頼むわけです。それで、主の名の宣言がずっと続いていく。

主の道をへりくだる者、しもべに教えてくれる。あなたの道を私に教えてくださいと頼んでいるところ(25篇)です。「あなたの道を私に教えてください」という出エジプト記33章にあるところですけど…それより前の先祖たちのところで、アブラハムが契約を与えられた創世記17章(1節)のところでは、「あなたは私の前を歩み全き者であれ」と言われているところです。契約、契約、契約ということばがいっぱい出ている17章です。それで、18章にいくと、「ソドムとゴモラの裁きをしますよ」ということをアブラハムに告げたところです。そこで、アブラハムはとりなしの祈りをする。これも、とりなしの祈りですね。モーセの時もとりなしの祈りでした。それで、その箇所のところ(創世記18:18-)に「アブラハムは必ず大いなる強い国民となり、地のすべての国々は彼によって祝福される。私が彼を選び出したのは、彼がその子らと、彼の後の家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公正を行わせるため。主がアブラハムについて約束したことを、彼の上に成就するためである。」この正しい者と悪者を一緒にしない、公義を行う神様は、愛する者に主の道を守らせるために選んだのです。契約を与えましたということをごこで言います。このあとにもこういう箇所を覚えて記念して、出エジプト記33,34章のところにありますが、申命記(11:12-13)でもこのように言います。「イスラエルよ。今、あなたの神、主があなたに求めておられることは何か。それは、ただ、あなたの神、主を恐れ、(主を恐れる人はだれか。詩篇25:12)主のすべての道に歩み(主はその選ぶべき道をその人に教えらる。詩篇25:12)、主を愛し、心を尽くし、精神を尽くしてあなたの神、主に仕え、あなたのしあわせのために、私が、きょう、あなたに命じる主の命令と主のおきてを守ることである。(その人はみずからさいわいに住まい、地を受け継ぐ。詩篇25:13)」これは、申命記のテーマになっています。主を恐れる者に道

を教えてください。その道を教えてくださいというところは、そこにもありますし、最後にあるモーセの歌のところ(申命記32:4)で、「主は岩、主のみわざは完全。まことに主の道はみな正しい。」というモーセの道です。モーセの道に歩むようにヨシュアは導かれて教えられる。ダビデの道に歩むようにソロモンが導かれる。ダビデが死ぬ前のところ、最後の歌。モーセの最後の歌とダビデの最後の歌。ダビデの最後の歌は18篇。18篇と25篇はまた今度見ますけれど…18篇と24,25,26,27篇は、第1巻の中で並行している箇所として与えられています。18篇にそのまま出ている第2サムエル22章。この中に、26篇にもありましたよね、「義にしたがって、手の清さにしたがって、私は主の道を守り、神、その道は完全、主のみことばは純粹。私の道を完全に探り出される。」神様は本当に歩んでいるかどうか見ている。歩む話があります。道の恵み深い、清いものなのかどうか、この18篇と25篇を一緒に見ることは、そういう意味でも正しいわけですね。それで、ダビデが死ぬ前のところに、私はいよいよ死にますよと言っているときにも、第1列王記1章29節で「私のいのちをあらゆる苦難から救いだしてくださった主は生きておられる」と言って、「ソロモンです」ということを言うバテシェバと話をするときの誓って言う。「いのちをあらゆる苦難から救いだしてくださった主」と、この最後の節(詩篇25:22)イスラエルをあがなってすべての悩みから救いだしてくださった。この苦難と悩みが同じです。イスラエルを苦難からあがない出した主は生きておられる。これが、イスラエルをあがなった苦しみから救った主という誓うときの言い方にもなっているところです。そういうところも思い出さないといけないでしょう。

第1列王記2章2節から4節、「ダビデが死ぬ日が近づいたとき、強くあれ、雄々しくあれ、主の戒めを守ってモーセの律法の書に書いてあるとおりに、主の道を歩んでください。そうすれば、栄えます。」という主の道を歩めということをダビデが言って、ダビデの道に、ダビデの道にと。ダビデの道に歩んだ王様と、ダビデの道に歩まなかった王様の話が、このあとにも出てきます。ということなので、ずっと言われている主の名、罪の赦し、そして、主の道を教えてください、このようなことが25篇のテーマになっています。エデンの園でアダムとエバが追い出された後に、ケルビムが言われるところ。いのちの木への道をケルビムに守らせる。主の道を守らせるケルビム。主の道を守らず、主の教えを守らずに、善悪の知識の木といういのちの木への道を守らなかったがゆえに、罪を犯す、もしくはそれが罪であり、それで恥をかく、恥を見る、はずかしめを受けるというストーリーは、このエデンの園のところから始まっているところだと思います。主の道を守るという箇所をいろいろ見ていると、主の道を守ってどうなるのかというと、主の道を守るなら私のものとなります。神様の民とされます。私の道を歩むなら、王座は揺るぎません。メサイヤは子とされます。この契約の祝福を得るための道が主の道といわれているもので、この25篇が主の道、罪を悔い改めるといようなことを言っても個人的な話というよりは、もっと大きな、個人も含めて民の罪を赦す。王様が代表で祈っている祈りということも言えると思います。24,25,26,27篇という並行して見ているときに大切ないろんな箇所がありますので、また一緒に目を回してください。